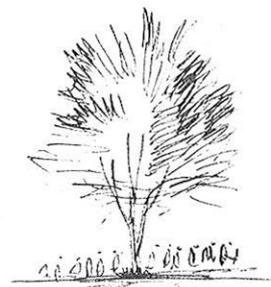


光の子



No. 81 1998. 12. 25.

● 神の召しに応える (ヘブライ人への手紙第5章4節)



「ほくのケーキ」

え・中島英子

クリスマスの祝福を

お祈りいたします

社会福祉法人 光の子どもの家

「父島も母島も」

ゐのこずちいい顔で来る下校の子

ゐのこずち頭でつかちだまりがち

母いまは老いてしあわせ石路の花

石路を咲かせてさびしがる母とをり

母の夜は煮込みうどんと漬大根

母島も父島も冬うららけし

聖樹の灯路地の奥にも点滅す

落合 水尾 (『浮野』主宰)

キリストの受難

ヘブライ人への手紙 4・15

この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、
罪を犯されなかったが、あらゆる点において、私たちと同様に試練に遭われたのです。

理事長 福島 勲

聖書にはイエスの言動については書かれているが、容貌や体格などについては記録がない。

ユダヤ人特有の曲がった鼻だったか髭をはやしていたか、体が大きく頑丈であったか、痩せていたかどうか、全然わからない。

ある背の低い男がマタイ六・二七を読んで、イエスは背が高くなかったのだろうと推測した。前の聖書の訳では「たれか思いわずらって身の丈一尺を加え得んや」とあった。

背の低いということがどんなにか悩みの種であったか、イエスご自身の体験からこのような表現となったのだろうか。

そういうわたし自身も子どもの頃から、ひ弱く小さくてどんなにか大きい者にあこがれ羨ましく思ったことか。

とはいえ、これからイエスは背が低かったという結論づけは無理なこととは言えない。

哲学者ヤスパースがイエスについて書いているが、その中でロバートアイズラという人からの孫引きで紀元一世紀のユダヤの歴史家ヨセフスの書いているイエスの容姿について記している。

イエスは三エレ（一エレは五五cm）の小さい体つきで、猫背で肌

の色は黒く、顔は長く、眉毛が濃く小さな髪をナザレ風に分け、髭はうすかったとある。

ヨセフスはイエスと同世紀の人であるが、この記述の信憑性はうすいといわれている。

ローマの聖ペテロ聖堂のミケランジェロの傑作、大理石像のピエタは十字架から降ろされたイエスを母マリヤが抱いている嘆きの像である。

永遠の乙女マリヤを象徴してか、マリヤは若い、その上体が大きい。腰をかけているが、そのまま立つと二メートルにも及ぶという。

作者はどう考えてか、これに比べてイエスの像はさほど大きくも遅しく頑丈とも思えない。

そういえば死刑囚は足を折ってとどめを刺すのだが、イエスの場合ははや死んでいて足は折らなかつたところ。（ヨハネ・十九・二三）

キリスト教に好意をもたない人々は、ゲッセマネの園でイエスの苦痛、苦しみ（マタイ・二六）を、神の子と自称する者のなんと惨めで矛盾に満ちた弱々しさと思わせる。

キエルケゴールは信仰者にとってイエスの歴史的なさまざまなことを知ることより、神がこの世において十字架にかけられたという命題こそが重要なことであると結論づけてい

るが、これを踏まえて出来ないまでも十字架の苦痛を想像することも重要ではなからうか。

イエスが叩いても打っても死なないといった超自然的頑丈な肉体であったり、原始教会時代の異端者の考えたような、イエスの仮現説、霊的存在で十字架が痛くも痒くもなかつたといった説からは、この人間の救いがたい罪の重荷の解決は見出すことは出来ない。

「罪は犯さなかつたが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に遭われたのである。」（ヘブライ人への手紙四・一五）

単に肉体だけの苦痛ではない。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである」（マタイ・二六・三七）と叫ばれる。

このイエスの苦しみこそ、われわれ全人類の救いに関わっているのである。

神は決して、人間の教化や罪の解決を目指されたのではない。

消すことの出来ない人間の染みや汚点を完全にぬぐい去られるために自らこの苦難をされるのである。

これらのことを十分にわきまえないでクリスマス祝うなどということとはナンセンスである。

エッセイ ただ今ギックリ腰

先日、N・H・Kの紅白歌合戦の出場者が発表になった。初出場の人やグループが、テレビで出場決定の感想を述べていた。高校野球の甲子園出場と違って、さすがに胴上げはなかつたが、嬉しそうにはずんで感想を述べていた。

ところが、どこかで聞いた様な名前や見た様なグループもあるが、その時初めてお目にかかるものなどあつて、おもしろかつた。なじみが薄いのである。

それは、彼等、彼女等が無名であるから、というのではなく、本当は超有名なのだろうが、こちらが知らないだけである。

それは当然の事である。その類のコンサートに出かけないからである。まさか、若者のコンサートに、シラガ頭の間が出かけていって、まわりの若者と一緒に、椅子の上に立ち上がり、両手を上に上げ、ギヤールギヤール拍子なんか、みっともなく出来はしない。だから、この類のコンサートにはもち論出かけないのである。では、テレビで見るか。これも殆ど見ない。新しい音楽が理解できな

いからである。音楽は理解するものではない、感じるものである、という反論もあろう。

だったら、感じられないからである、と言いつても良いかも知れない。

いつの時代でも、何の分野でも、新しいものは、必ずすんなりと受け入れられるとは限らない。しかし、現代の、紅白に出てくるような新しい若者の音楽が、時代に受け入れられて、大道を歩むとすれば、それはめでたい事であろう。

そのようなものに感動し得ない私の方が、むしろバカなのであつて、新しい時代に反応できず、時代を拒否しているのかも知れない。

それは、言いかえれば老化である。ここまで来て、私は気づく。老化の具体的な現れなのだろうか。現在ギックリ腰の真ん中にある。これも、私の場合老化現象だろう。

先日、長い疲れがたまつていて、ところに、彫刻の展覧会があつて、そこへ重い作品を運んだのである。会場では、展示の作業をするわけだが、ずい分無理な姿勢で、体に不自然な

力をかけていたのであつた。元気な時なら、こんな事は平気なのだが、自分がどんなに疲れているのか自覚できない程度に疲れていたのである。そして、すべて展示が終わって、少し低めの椅子に腰を下ろし、右にいた人に声をかけながら、右に体をひねった途端、グキッと来たのである。その時の痛さといつたら、表現のし様がない。

やっこの思いで、電車で家に帰つたが、寝るにも起きるにも、痛くてやりきれない。くつ下も、家内にはかせてもらう始末であつた。

家内は娘に電話した。「お父さんが、だらしなくなつちやつたよ。」娘は驚いて、本当に私がボケてしまつたと思つてしまったらしい。「それで、おしっこをもらしたりはしないの？」と来た。「それは大丈夫、ギックリ腰なのよ。」と家内が言うのとそれにしても、お父さんは、自分がいつまでも若いつもりでいるんですよ。だから、もう若くはないんだと、神さまにガツンとやられたのよ。老人としての自覚が足りないんだよね。」

とのことであつた。

家内と娘は、お互いの意見の一致を見て、大いに納得し合つたのであつた。

『老人としての自覚』いやな言葉である。しかし、私の場合、それは言えるのかも知れない。昭和のやつと二ケタ生まれ、ついこの間定年を終えたばかりとは言え、もうすでに、『矢でも鉄砲でも持つて来い』などとは、決して言えない年齢なのである。

若者の新しい音楽を拒否し、若者の風俗や文化に背を向けて、老人の世界に入り込んでしまつて、そこに安定を見いだそうとしているようなカッコウはしてみたものの、実は、本当の意味での『老人としての自覚』に至っていないのである。

彫刻家 中島 睦雄





おめでとう

☆ ☆ ☆

クリスマスについて
中一 沙慧

クリスマスというとページェントを思い出します。でも私はページェントはあまり好きではありません。多くの人の前で踊ったりするのはとても緊張します。

でも、それが終わって、いっぱい拍手の時は嬉しくほっとします。そしてアツという間に楽しい時間が終わってしまいます。

私は、そういう時間がとても好きです。

☆ ☆ ☆

クリスマス

中一 一志

毎年、クリスマスに、家ではクリスマスページェント、いわゆるイエスキリストの生誕劇を、聖書朗読、讃美歌、振り付けなどを、一人に一役を任せられ、光の子どもの家の全員で一つの物語をします。

ページェントをしている意味はよく分かりませんが、おそらく、より多くの人々にイエスキリストを知って欲しいからだと思います。

日本人は、クリスマスの意味も知らずに、街では騒いでいます。そんなことを見聞きすると、僕も、みんなが生まれたことを喜ぶ日だということと理解して欲しいと思います。

今年も、多くの人々に、イエスのことを知ってもらいたいので、心を込めて示したいと思います。

☆ ☆ ☆

クリスマスに思う

木部 すなお

光の子どもの家に来て、クリスマスをとて神聖に思うようになりました。

私がちょうど高校三年生の時です。どこへも出かけず家族で夕食をしました。クリスマスというのに、その夕食のおかずは何と干物だったので。私の両親にとっては、いつもと変わらない日として過ごしていたのです。

☆ ☆ ☆

クリスマスについて

高一 萌季

今年、クリスマスが近づくと街も教会も、そして光の子どもの家もクリスマスに向けての準備をします。

☆ ☆ ☆

クリスマスについて

中二 珠美

みんなと日曜日、ずっと教会に行くようになって、何となくクリスマスの意味が分かるようになってきた。

☆ ☆ ☆

クリスマスに思う

村上 勇

でも最近は、何のためにクリスマスがあるのか、恋人のため？というにこった考えをもつようになってしまった。大きくなったから？そんなわけではない。

☆ ☆ ☆

クリスマスについて

中三 亜紀

準備をしていきたい。今だから、大きくなったから出来ることをしたい。今までの最高のクリスマスだったと思えるように。

☆ ☆ ☆

クリスマスについて

中三 亜紀

クリスマスとは、イエスさまの生まれを喜んで祝う日です。だから私たちの家では、ページェントなどをして楽しく過ごします。

☆ ☆ ☆

クリスマスに思う

村上 勇

クリスマスシーズンになると、大学三年生時に聴いたある講義を思い出す。なぜその講義をクリスマスシーズンに聴いたとはつきり覚えていないのか。それは、先生が余談の中で、若いカップルがイヴをふたりで過ごすとしてホテルを予約している風潮を「年端もいらない子どものくせに」と戒められていたからである。

☆ ☆ ☆

クリスマスについて

村上 勇

先生はそのときの講義で、大学における法学教育の在り方について次のように述べられていた。

クリスマス



欧米では宗教と生活は一緒になっているというが、日本はそうではない。便利に使い分けていると思う。

私も、クリスマスの意味を考えながら、知らない人たちに伝えることが出来るかと思う。

私にとって残り少ないクリスマスである。イエスが生まれたことを本当に喜び、悔いのないようを迎えたいと心から思っている。

☆ ☆ ☆

クリスマス

神田 幸枝

「あつサンタさんからだ。」「汽車だ！」

☆ ☆ ☆

クリスマスのこと

小五 詩美

私は小さい頃、クリスマスのごちそうがあまりよく分からなかった。クリスマスにはサンタさんがくることは知っていた。他のことはよく知らないでいたように思う。

去年の今頃は、クリスマスは友達同士で楽しく過ごしたいという気持ちでいっぱいでした。今年もそういう気持ちがあります。

でも、私は最近「家で過ごすのもいいかな。」と思っています。クリスマスに友達と過ごすのは、この先何回もあるだろうけど、家で過ごすのは、今年も入れてあと三回しかないということに気づいたからです。

ここで迎えたクリスマスはもう十三回にもなります。今までは何気なく過ごしてきました。誰かの言うことに従ってなされるがままに生きてきました。

でも、もうそれだけじゃいけないような気がします。

来てくれた人たちにクリスマスという日を楽しんでもらえるように、そして、自分自身でも楽しめるように努力してよいクリスマスを実現したいです。

☆ ☆ ☆

クリスマスについて

穴水 祐介

「よくよくあなたがたに言っておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだら、豊かに実を結ぶようになる。」(ヨハネ福音書)

☆ ☆ ☆

クリスマスについて

中三 亜紀

クリスマスとは、イエスさまの生まれを喜んで祝う日です。だから私たちの家では、ページェントなどをして楽しく過ごします。

☆ ☆ ☆

クリスマスに思う

村上 勇

クリスマスシーズンになると、大学三年生時に聴いたある講義を思い出す。なぜその講義をクリスマスシーズンに聴いたとはつきり覚えていないのか。それは、先生が余談の中で、若いカップルがイヴをふたりで過ごすとしてホテルを予約している風潮を「年端もいかない子どものくせに」と戒められていたからである。

☆ ☆ ☆

クリスマスについて

村上 勇

先生はそのときの講義で、大学における法学教育の在り方について次のように述べられていた。

☆ ☆ ☆

クリスマスについて

村上 勇

学生の過半は裁判官や弁護士になる人ではなく、それ故細かな判例や学説を知ることが、大学で法学を学ぶ究極の目標となり得ない。法学教育の目的は、法曹や官僚の養成ではなく、社会的公正を実現するための強靱な論理構築力を育むことにある。決して法律制度の知識や理解が、支配層の独占物になってはならない。

私の卒業した法学部が、次々と法曹を排出するような名門ではなかったこともあって、素直に先生の考えに共感できた。そのためが児童養護施設の職員となつて今でも、法律学への興味は失われていない。むしろ、「養護を要する児童」たちとのつきあいを続けているうちに、先生の言われた「社会的公正の実現」に役立つ法的素養を身につけたと強く感じるようになっていく。



クリスマスシーズンになると、大学三年生時に聴いたある講義を思い出す。なぜその講義をクリスマスシーズンに聴いたとはつきり覚えていないのか。それは、先生が余談の中で、若いカップルがイヴをふたりで過ごすとしてホテルを予約している風潮を「年端もいかない子どものくせに」と戒められていたからである。

プルーム

子どもたちの季節 仙道家

クリスマスおめでどうございます。

四月にやってきた小学三年生の由花にとつてここで迎える初めてのクリスマスです。

クリスマスは、イエス様のお生まれになった日、とは由花の中ではまだなっておらず、サンタクロース、プレゼントを真っ先に連想します。

「祐子さん、クリスマスプレゼントは、ゲームボーイのポケモンのカセットが欲しいんだ」「ゆうこさん、サンタクロースって大人がやっているんだよね。」「ゆうこさん、サンタクロースっていると思う？ ゆかはいると思うな。」と、なんだかんだ言ってもサンタクロースの存在を信じている由花だから、イエス様のお生まれになったクリスマスのお出来事も素直に受け留めるでしょう。

サンタクロースがやってきた翌日の朝食は、嬉しい顔で溢れます。「サンタさん、何か穴水さんみた

いじやなかった？」「ええ、田中先生だよ！」「せっかく寝てるのにメリクリスマス！って起こすんだよね。変わってるね。」という話などです。

今年も、うきうき楽しい気持ちでクリスマスを待ち、暖かいクリスマス

私がおもてなすように！。私が子どもの頃サンタクロースはきてくれませんでした。一度だけきてくれました。夜、寝入りばな、枕元にそつとプレゼントを置いていてくれました。グリコのアーモンドチョコレートでした。池田 祐子

暮らしの彩り 笹山家

クリスマスのご挨拶を申し上げます。

三歳の花子はハサミが大好き。ハサミを手にしていれば、二〇分〜三〇分は集中して遊んでいられる。花子がハサミで遊んでいる時間は、家の中がひっそりと静まり、そして、何が起こるか判らない時間でもある。

光の中で 佐藤家

クリスマスおめでどうございます。生命というものを考えるとき、人間の思いとは全く別の大きな力を感じます。聞きかじりですが、赤ちゃんは月数が満ちるまで、一生懸命お腹に留まろうとするのだそうです。そしてお母さんの方も一生懸命その小さな生命を守り、育もうとするのだそうです。親の意志とは関係なく、人間の自然な働きなのだとのことです。皆そうやって生まれてきたのです。

ここには、望まれずに生まれてきた子どもが少なからずいますが、どの子どもたちも、生まれてきてよかったと思えるようになることを養育の目標にしています。そして、その子どもたちのひとり一人に対して、生まれてきてくれたこと、出会えたことを感謝するということ、それを伝えることがここでの大きなテーマです。

時には心底腹が立ってしまふことや、どつぷりと落ち込ませられもし、どうして出会ってしまったのか。喜べるのか。私でよかったのだろうかかと自問してしまう場面もあります。そして反省させられるのです。また

たいいてい、花子は新聞の折り込み広告を切っている。細かいものや細長いものなど、とにかくチョコチョコキと切り続ける。床の上は刻々と紙屑で覆われ、雪のように積もる。

ある日、気がつくとき家の中がとてもしずかで穏やかな空気が流れている。案の定、花子の姿が見えない。慌てて探す。誰にも見つからないように部屋の片隅で壁に向いて座り、チョコキンチョコキンとハサミの音。

「花子ちゃん」と呼ぶと、さつと手を隠し「何にもしてないよ。」と言いつつ、何と自分の爪を切っていた。

花子の髪が伸びたので切つて揃えた二日後のこと。姉の美季が走ってきた。「ハナちゃん前髪切つてるよ」という。何とびつくり！見つかるといって押入の中でちよきちよき。バカなあんちゃんが剃りを入れたように短くなった前髪と押入の中に散乱する髪の毛。叱る気も失せて大笑い。

おもちゃの電話の線、くま柄の洋服の熊さん、洋服のボタン……。切つたものの数々は突飛で大人の想像を超える。まったく……。笹山 恵理

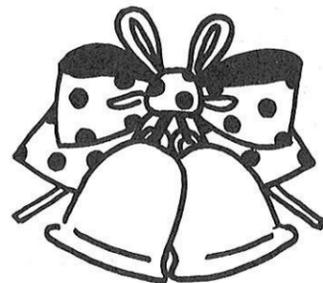
自分の都合で判断しようとしていると、その生命に対する価値判断など誰に出来るのでしょうか。

どんなにマイナスを働いてしまつたとしても、その子どもを応援し続ける一人でありたいと願っています。それを可能にするような我慢強さを、そして何よりも子どもの成長を助けることの出来る力量を授けて欲しいと願ってしまうのです。岩崎まり子

河のほとり 倉沢家

毎年クリスマスイヴにはキャンドルサーヴィスが行われ、担当者から子どもへ、子どもから担当者へメッセージを贈る。今年もそろそろメッセージをまとめなくてはいけない時期になった。

十三回もメッセージを贈ってきたことになるが、毎年子どもたちへの



原田家日記

カサカサと葉の舞い上がる季節。暗くなるのは、アツという間。その時間と競争するかのよう外で遊び続ける子どもたち。そのうち、「信恵さん、美夏がねえ」「うんね、美夏がね」「美夏ちゃんが……」泣いて訴えてくる子、走って告げに来る子、ついでに「きょう、学校でね」と連絡帳役を果たすかのように伝えてくれる子を含め、私のまわりは「美夏情報」でいっぱいになる。

この生活に、すっかり慣れた。入所後、半年経過。仲良くすることって、こんなに難しいんだ、というこ

詫び状のようになり、年を重ねるごとに謝罪しなければならぬことが多くなっているような気がする。

心の病のために半年近くも入院している嬉には日常的に何もしてあげられない状況。高校に入り確実に成長している勇にも相変わらず口煩くなってしまう。受験生の重圧には、口を開けば「勉強！」になり、逃げ場のない状況を作つてしまい、沙慧は一人でも何でも出来る……と決め始めど放任状態だ。こんなことを繰り返している担当者を子どもたちは今年もきつと許してくれるのだろうか。

十三回もここでのクリスマスを迎えると、クリスマスチャンでない私でも「クリスマス」がとても大切なものに思えてくるから不思議である。それはきつと神さまの力ではなく子どもたちの力なのだと思う。倉沢智子



とと、仲良くするって、こんなに楽しいんだ、ということ、思う存分、味わっている毎日である。本人は、何かあれば、私のところへ戻り、私のおなかに顔をこすりつけ、ついでに涙や汗を拭いて、また元気に飛び出していく。

「信恵さんが、おばあさんになって、そして私がお母さんになるとするでしょ、そしたら、信恵さんに『ありがとう』って、きつと言っよ」思いがけない言葉が、何の脈絡もなく出てきた。もつと早いと嬉しいが、それでも、そんな日が来たら、それで十分だと思った。

優子が入所した時も、美夏と同じ小学三年生。そしてこの秋二一歳。十月十八日、入籍した。お揃いの結婚指輪はシンプルに輝いていた。住居を定め、家財道具を揃え、近所の方にタオルを配って挨拶回りも終えたという。「やっぱり部屋の片づけが一番大変。」との感想。それを聞いて「まあ、信恵さんのグループの子は、みんなそうか」と納得顔でうなずく子どもたち。「今のうちに困らないようにしなさい」とメッセージ。一つの区切りを感じた。また新しいスタートである。いつもと違う思いで迎えられるかな、そんなクリスマスになりそうだ。竹花 信恵

現場から

光の子たちと ⑩

藤本 曜子

一歳七ヶ月で家の一員となった裕も三歳になりました。細くく泣いてばかりだった赤ちゃんも、いたずら大好き、やりたい放題、すっかり腕白坊主です。大きいお兄ちゃん、お姉ちゃんたちの意地悪も何のその、言い返し、やり返す程のたくましさです。そんな裕ですから、してはいけないことを注意され、叱られる回数も増えてきました。先日も夕食後、いたずらをして、私が少し厳しめに叱りました。その後、お風呂に入り、体を洗ってやり、一緒に湯船につかります。そして裕の体を抱き上げ、目を見てにこっと笑うと、裕は少しとまどった顔をして「どうして、よこたんおこるの？」と悲し気にたずねました。「それはね、祐ちゃんにいい子になって欲しいからだよ」と答えました、が、本当にそうだったのでしょうか。

次の日、裕はやっばりいたずら、腕白坊主です。でも、昨日思ったことを心にとめ、一日を過ごす努力をし、一日叱らずに過ごせた・・・？と思います。

たくさんの者同士が一緒に生活するということはお互いに我慢しつつ自己も主張し、尊重しあえなければ、とても心安まる豊かな生活は送れません。逆にそれぞれがいろいろなことを知らんぷりして何となく過ごし、近くにいるのに他人のような生活になっってしまうことも考えられるでしょう。きつと後者は、何か寒いけれども、簡単に得られやすく、私たちがそうなる危険を持っています。独りよがりではない生活、暖かい生活を作る大変さ、自分の力量のなさを振り返らせられる思いです。

三年前、就職が決まり、初めて光の子どもの家のクリスマスに参加しました。二三日から二五日の三日間を過ごしたのです。

クリスマスイヴの二四日、キャンドルサービスに同席しました。その雰囲気胸が熱くなり、とても感動したことを覚えています。そして、

子どもたちと一緒にクッキーを焼いたり、少しずつクリスマスの準備を重ねていく職員の方々の姿に心の温まる思いがしました。そして鈴の音とともにやってくるサンタクロース。二五日の朝プレゼントを開けた子どもたちの顔。クリスマスらしいクリスマスに感激し、すてきな三日間を過ごしたことは、今でも印象的です。

さあ、いざ光の子どもの家で生活する者となり、クリスマスを作り上げていく側に加わりました。実際の私はどうでしょう。準備に翻弄され、私が初めて見たクリスマスのおとなと子どもの姿とは、ほど遠いものです。バタバタと慌ただしくクリスマスを迎えているのは・・・創りあげていくことの大変さ、歴史を感じさせられたように思います。

今年のクリスマスの前の一週間に、高校二年生の紅子が、アメリカにホームステイします。埼玉県内で一人という枠に見事入ることが出来たのです。毎日コツコツと勉強し、英語が好きで、将来それを役立てられれば、と願っている彼女。八日間の旅はきつと彼女にとって、本物に触れられる



最高の機会になるでしょう。そして、私にとっては、二四日に最高の体験をし、少し変わった紅子に会うことが、クリスマスプレゼントになるのだからと、期待しています。

光の子どもの家で生活するようになって三度目のクリスマスを迎えます。

お互いを思いやり合えるような、豊かな生活を目指しながら、子どもたちとゆつたりと準備を楽しみ、温かいクリスマスを、迎えられようように、と願っております。

メリークリスマス！

養護メモ 76

福祉施設はどこへ行く

菅原 哲男

児童養護施設光の子どもの家は、誰からも評価されず、捨て置かれることの多かった子どもたちを、何よりも大切に育てていくために建てられ運営されてきた。

光の子どもの家の開設以来、社会福祉の原点は、溺れている子どもを見越こしに出来ない心の持ち主が、前後を省みず飛び込み助けようとする決意や行動であると確認してきた。

最近の進歩的研究者を自認する者たちに、その辺の評価が不当に低くされている感があるのだが、特に明治大正昭和初期のキリスト者の先達者が、そのような情念が決意を生み出し施設を建設運営し、現在の社会福祉の基礎を形成してきたことは、社会事業史などでも明らかである。

そのような状況が、戦後、国の責務として制度化され、発展の一途をたどってきたのである。高度経済成長政策の中で、その制度も飛躍的に整備されてきたことは、評価し慶賀すべきことであろう。

そして今、これまで増加してきた税収の維持の困難どころか、マイナスしか見えない状況に陥り、手始め

に政治的に最も弱い部分からリストラを進めようとしているのだろうか。

曰く、社会福祉基礎構造改革などとカッコいい名称で、社会福祉施設に市場原理を導入し、規制緩和して企業の参入を図り利用者への福祉サービスの向上を目指すというのだ。

さて、最初の、困窮している者を見越こすことが出来ない現在の者たちが、後回しには出来ない現在の者として関わり、一緒に暮らしてきた場面では、何よりも生活を共にしてきたのである。制度などないことで大層な苦勞があったことは伝えられてもきたし、想像に難くない。しかしそこには、苦樂を共にすることで醸成された羨ましいほどの信頼関係が豊かに形成されていたことも事実であったのである。(共栄学園短期大学「共栄社会福祉研究」第三号、五味百合子論文、など)

戦後の兩十年ほどは制度化されたことで、やっとなる程度ではあったが、とりあえず生活は何とかなってきた。ここら迄はまさに苦樂を共にしていたし、働く者の権利などは最初からないものとして関わって

た者たちが殆どであったのである。特に、一九六〇年代からの急激な条件整備によって社会福祉に関わる者たちの生活がある程度保障されるようになってきた。

児童養護施設にしてみれば、子どもの生活権の確立が主命題なのだが、ほぼそれと並立して働く者の権利が現場に表現され、更に専門職制度の導入などによって、社会福祉現場の、一人分の救命の船板が、専門家に奪われかねない現象が紛れ込むような状況を来したのである。(鉄道弘済会「社会福祉研究」六九号巻頭言、秋山智久)この秋山論を敷衍すれば、家庭という船が難破し溺れながら漂流する子どもがやっとなるがみついた一人分の救命の船板に、労働者の権利がたどり着き、専門職が奪おうとし、利潤追求のスペシャリストが占拠しようとするのである。

光の子どもの家の設立時の一つの主題が、「職場で子どもは育たない」であり、建設する子どもたちの生活場面からの労働性の可能な限りの捨象であった。

こんなに豊かになったこの国で、親から虐待される子どもがこのところ激増している。入所してくる子どもたちの大半が被虐待が理由か、事実としての明らかかなそれであるのだ。

どこよりも安心して誰よりも信頼すべき家庭での家族、とりわけ親である筈なのに、彼らが生命身体を危険にさらし、家庭が暴虐の密室現場と化しているのである。

そのような子どもたちに関わるための知識や技術の研究成果は未だしの状況ではあるが、何よりも通常の幾倍もの安定や信頼関係の形成こそがわれわれの責務であると考える。

子どもの養育に最も重要な要因は関わる者の知識や技術などの質量と子どもたちへの豊かな愛情表現である。故に労働条件の向上は運営管理する者の重要な課題の一つである。

しかし、労働時間の短縮は、イコール子どもと関わる時間の短縮で、待たされることの多い子どもたちの生活がさらに待たされる生活を常態に結果する一面もあるのである。

そこへである。もう一つ、利潤追求が入り込んでくるというのだ。

今こそ、秋山氏が参照されるように、一人分の救命の船板であった社会福祉施設の現場が追求すべき目的の明確な一元化が急務なのである。

ときはまさにクリスマス！。それは、見失ってしまった人としての本来的な在りようは、人との関わりにある痛苦を回避しては回復しないことを、伝え続けている。

クリスマス
おめでとうございます
楽しいクリスマスをお過ごし下さい
☆光の子どもの家 職員一同 ☆

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

1998年 8月1日 ▶ 9月末日

- 8月 幼児 6名 小学生 5名 中学生 9名 高校生10名
措置外 3名(求職者2名 未自立1名)
- 2・4日 群馬アバコ・グリーンビレッジで開催された東大宮教会教会学校夏期学校に幼稚園小学生10名が
- 6日 はむこ会のご招待で小学生が自衛隊百里基地見学
- 8日 建物補修工事を国際婦人福祉協会と大利根町助成で
- 9日 トワイライトスティ2名
- 長老教会の修養会に中1女子参加
- 夏期帰省始まる
- 12日 高校中退して職員宿舎で社会的自立を目指していた足立鷹貴熱烈ご支援と根気強いご指導をいただいた栗原造園を退職
- 11・14日 帰省できない子どもたち8名が府川ご夫妻戸辺喜久雄 黛執 岩井卯吉各氏のご協力で湯河原海岸での海水浴の3泊4日
- 日本キリスト教団埼玉支部の高校生キャンプに塩野 潔 源将司 福島文明が参加
- 坂巻直之照子元職員宅に前杜珠美16日まで宿泊
- 19日 加須保健所立入検査
- 22~3日 東大宮教会中校科夏期学校 7名参加
- 29日 さよなら夏休みパーティ
- 毎年の恒例となった萬屋さんのウナギを今年も
今月の物品ご寄贈者 横浜市の大段聖子氏 町内木場芳三

- 9月
- 1日 2学期開始
- 高山嬉の件を騎西高校と協議 深いご理解と心強いご協力を得る。
- 3日 食堂の補修と床張替ペンキ塗装などの工事始まる
- 8日 後援会と愛育班の共催の夕食会
- 12日 後援会と婦人会共催の手作りの夕食会
- 15日 菅野圭樹博士ご来訪して関わりのご指導を
- 25日 校長以下19名の教師と子どもたちの指導方針の確認と協議を中学校で 今後の連携を確認
- 26日 朝日新聞社主催「高校生海外生活体験の旅」林碧が
- 地域への関わりを本格的に強化していくための拠点として『地域交流ホーム』の建設を埼玉県共同募金会に申請予定 共同募金会より現地調査にご来訪
- 27日 町内旗井の井坂氏が県立高校をこの春退職し 学習指導のボランティアの申し入れをお受けする
- 29日 第54回理事会「地域交流ホーム」設置の承認
- 30日 江森ヘヤーサロンより散髪ご奉仕
今月の物品ご寄贈者 横浜市大段聖子氏 町内大塚吉春氏 松井氏
こんな日々が子どもたちを成長させていきます(くら)

/// // // // ———— 反 射 光 ———— // // // //

☆クリスマスの喜びを共にしたいと思
います☆本号はクリスマス特集として、
子どもたちと職員の思いをちよっぴり
表現してもらいました。それぞれの思
いが出ていて、名前や顔や生活が重
なると思わずにんまりしてしまいます
☆特に選んだ訳ではないのだが、原
稿の依頼をした子どもたちは一様にす
んなりと諾してくれました☆いつもは、
原稿集めが大変で特集をやめてしまっ
たこともあるほどなのですが、子ども
たちの何人かが「残り少なくなった」
と書いてるように「年輪」なのでしょ
うか☆伝えようと願ったことどもも、
子どもたちの体の中に沈潜しているの
だろうか、などと虫のよい想像まで逞
しくしてしまいます☆今朝は小学生の
女の子がクリスマスページェントの歌
を口ずさみながら霜でカチンカチンに
凍った黒い土を踏んで登校していきま
した☆この季節の美しい光景のひとつ
です☆更に大きな心を育んで新しい
世紀を担う子どもたちの備えとしたい
と願っています。乞うご支援 (哲)